九州産業大学国際文化学部紀要　第32号　1－37（2006）

朝鮮戦争前後の廉想渉小説について
—1948～53年を中心に—

白川　豊・小野順子*1

［目　次］

はじめに

第1章　長篇小説「暁風」（1948年）について
Ⅰ．書誌的事項と時代背景
Ⅱ．主要登場人物と梗概
Ⅲ．作品の考察
Ⅳ．先行研究の批判的検討
Ⅴ．小結

第2章　朝鮮戦争期の短篇小説について
Ⅰ．はじめに
Ⅱ．海軍入隊の動機と海軍体験
Ⅲ．作品考察
1．作品内容の概観
2．廉想渉の戦争認識
3．廉想渉の女性観と女性描写
Ⅳ．小結

おわりに

はじめに

廉想渉（ヨムサンソプ）（1897～1963年）は，いうまでもなく朝鮮近現代文学史上，有数の小説家であるが，彼の活動は1945年を境にして植民地期と「解放」後の両方にまたがっている。このうち，「解放」後の作品に対する研究はこれまで長篇「驟雨」（1952～53年）など，代表作を中心としたものが大部分を占めてきた。

本稿では体系的な研究が必ずしも活発でない朝鮮戦争（1950～53年）を前後する数年間，具体的には1948年～53年に発表された作品に焦点を当て，まず第1章で「驟雨」が生み出される直前のもう一つの代表作である長篇「暁風」（1948年）を取り上げる。また，第2章では，「驟雨」とほぼ同時期に書かれた他の短篇小説を分析する。これらによって，この時期の廉想渉文学の特質を，より立体的に探るための試論としたい。なお，第1章は白川豊が，第2章は小野順子が担当し，「はじめに」「おわりに」は共同で執筆した。

*1　九州産業大学大学院　国際文化研究科　博士課程（5年一貫制）

第１章　長篇小説「暁風」（1948年）について

Ⅰ．書誌的事項と時代背景

廉想渉の小説「暁風」（暁の風）[1]は『自由新聞』に1948年１月１日から11月３日まで都合200回にわたって連載された作品で，廉が1945年の「解放」後，初めて手がけた長篇小説である。中国の安東で「解放」を迎えた廉想渉は，翌46年６月頃にようやくソウルに帰り着くのだが，『京郷新聞』創刊時の46年10月から同誌の編集局長となった。しかし47年７月には辞職し，創作に専念しようとしたが，まだ短編を２，３篇書いた程度だった。それだけに，本格的な長篇小説であるこの作品にかける意気込みは相当なものだったと思われる。連載の最終回を脱稿したのが９月15日と末尾にあるので，１年近く構想して書き続けたことになる。この間には48年８月15日に大韓民国が成立し，同年９月９日には朝鮮民主主義人民共和国が創建されているので，現在まで続く朝鮮半島の分断状況が完全に固定化された時期を挟んで書かれていることがわかる。

ところで，この作品は全32章からなる新聞連載小説であるが，掲載紙である『自由新聞』の影印版が1996年に刊行（《解放空間新聞資料集成》，ソンイン（선인）文化社）されたものの，印刷状態が不良のため閲読が困難であったことから，これまで「暁風」に対する本格的な研究には少なからぬ支障があった。この状況は圓光大学校の金在湧氏が1998年に実践文学社から『廉想渉選集２　暁風』として，新聞連載分を底本として単行本化したことで大いに改善された。そこで本稿もこの単行本をテキストとして使用することにする。

さて，この長篇は1947年末から翌48年の春までを時代背景として，当時の混乱した政治状況と世相を虫瞰図的に描いた作品である。そこで1947年から48年夏にかけての朝鮮半島の政治的な状況をまず簡略にたどっておきたい。

「解放」直後に北緯38度線でアメリカ軍とソ連軍に分割占領された南北の将来を協議するための米ソによる共同委員会は，両陣営の思惑からなかなか進展せず，1947年７月10日には第２次共同委員会がついに決裂してしまった。そのような中，国内の左右両派の衝突も深刻化し，47年７月19日には国連による信託統治路線を支持して左右の統一戦線をあくまで貫こうとしていた呂運亨が暗殺されている。一方，後の韓国初代大統領になる李承晩は，国連監視下での南朝鮮単独選挙を推し進めようとしていた。これに危機感を抱いたライバルの金九は1948年４月，平壌で開かれた南北朝鮮の政党人らによる連席会議に参席したものの，結局，５月10日に単独選挙が強行されるに至る。あくまで南北協商運動を続ける金九は後（49年６月）に暗殺されることになる。

このように，国際的な冷戦体制下での米ソの対立と，これと複雑にリンクした朝鮮

内での左右両派のつばぜり合いが高潮していたのがまさに「暁風」の連載されていた時期であると言える。この時代を廉想渉がどのように切り取って描いたのかが検討されるべき課題であろう。但し次節の梗概で詳しく紹介するけれども，小説の扱う時代の範囲は1947年12月24日から翌48年の４月３日までである。つまり，執筆完了の半年ほど前で話を止めてあるのだが，このことの意味についても考えてみたいと思う。

Ⅱ．主要登場人物と梗概

「暁風」の内容を見る前に，主要登場人物についてまず簡略に述べる。

金恵蘭（ヘラン）（23歳）：Ｌ女子専門学校英文科卒で，母校のＳ女子中学校で英語教師をしていたが，〈アカ〉呼ばわりされて昨秋，学校をやめ，骨董品店・瓊瑤閣（キョンヨカク）の店員となる。

朴秉直（ピョンジク）(25，6歳か)：夏までは左派系のＡ新聞社にいたが，今はＢ新聞社に移っている。恵蘭の婚約者格だが，崔和順と親しくなる。長身の美男子だが，優柔不断なところがある。

崔和順（ファスン）：東京留学の後，Ａ新聞社で記者を５年間している。積極的な性格で，元同僚の秉直と親しい。

朴宗烈（ジョンニョル）：秉直の父親。醸造会社の社長で，右派の××青年団を後援している。植民地時代には，道会議員だったが，「解放」後も時局に乗って活動している。

金寛植（グァンシク）（50余歳）：恵蘭の父親。朴宗烈の昔からの友人。アメリカ体験もある英文学者で，現在は大学に出講する以外は書斎に閉じ籠って読書と酒の毎日で，世の中を傍観している。

李晋錫（ジンソク）（40歳前後）：骨董品店・瓊瑤閣の店主。青年期にハワイで20年近く暮らし，「解放」後に帰国。英語が流暢で，金もうけばかりを考えている。

ベーカー（25，6歳か）：元総領事の父親と共に，12歳で日本に３年，15歳で上海に２年滞在。貿易関係の機関に勤務。朝鮮民俗に関心があるインテリの好青年。

ブラウン(30余歳)：父親が30余年間，朝鮮で雲山金鉱を経営していた関係で，朝鮮で生まれた貿易商。妻はミッション系学校の教師で，恵蘭を教えたこともある。

張万春（マンチュン）（45歳前後）：女学校の英語教師。寛植と親しく，恵蘭は教え子。アルバイトで通訳などをしており，骨董品店にも出入りしている。

金子（カネコ）：「解放」前からの料亭・翠松亭（チュイソンジョン）のマダム。朝鮮語も上手な美人の日本人で，婿養子の夫・林平吉は朝鮮人。

趙貞媛（ジョンウォン）：左右政客の溜まり場になっているタバンコル（茶洞）の特殊料亭・ヌニム

チプ（姉さんち）のマダム。資産家と結婚した，日本の×女子高等師範数物理科卒のインテリ。

姜スマン（22，3歳）：李晋錫の妾の弟で，瓊瑤閣の事務員。右派の××青年団の宣伝と情報の責任者だが，一方で別のA党にも密かに属している。別名：張ユンマン

朴ソク：表は××青年団員，裏は××労働組合員。左右両派に通じたスパイ的人物で，スマンと情報交換している。別名：金ヨンシク

このような人物が登場するこの長篇の梗概は次のようなものである。

1947年12月24日のソウル。恵蘭の勤める瓊瑤閣にはアメリカ人も来るので，店主の李は彼女を利用して米軍政庁にも入り込もうと考えていた。そこへ朝鮮の民俗に関心があるというベーカーが来店，応対した恵蘭に好意を抱く。しかし，彼女には秉直という恋人がいた。その秉直には左傾記者の和順が接近し，説得されて彼は「以北」（北朝鮮）に渡ることまで考えるようになる。

ある日，日本人マダム金子の経営する料亭・翠松亭で顔を合わせた秉直，恵蘭，和順，李，ベーカーらは，ダンスホール・スワローに繰り出した。そこではフトした弾みで皆，日本語でベーカーを相手に軍政下でのアメリカの責任問題を追及する話になってしまう。利権屋のアメリカ人をのさばらせているから，右翼も左翼もアメリカを信用しないのだと言われてベーカーは，せいぜい「朝鮮問題を研究するクラブを作ろう」[2]というのがやっとだった。秉直はそれを聞いて，「フン，新版の緑旗連盟だな」[3]と笑うのだった。

恵蘭の父・金寛植は久々に外出したが，ソウル市内の軽薄な雑踏ぶりに不愉快になる。サシミもビフテキも，桜餅もチョコレートもいやになった。初めて朝鮮のピンデットク（緑豆のお好み焼き）のおいしさがわかった[4]と思う寛植だった。彼の家に秉直の父が右派の××党の分会長の出馬要請に来るが，彼はきっぱり断る。

恵蘭が5日ぶりに秉直に会うと，彼は和順との交際を白状したが，恵蘭もベーカーと付き合っているではないかと逆襲される。秉直はその直後，暗闇で右翼青年団員たちに殴られて入院。恵蘭はやむなく病院に駆けつけた。二人はこれまで，民族か階級かという根本問題について本気で話し合ったことがなかった。秉直にしてみればこの点が恵蘭と和順のどちらを選ぶのかに直結していた。そのうちに入院を聞きつけた和順が見舞いに来て，二人の女性が秉直の世話を競い合う形になった。秉直の母親らは恵蘭を好ましく思っているようだった。

秉直が入院して1週間。和順は来なくなった。彼の包帯はまだ取れなかった。と，刑事が来て，「主義者」の李東民（ドンミン）が来ただろうと詰問される。その直後，秉直は歯の治

療と偽って病院から逃げ出す。また刑事が来て，秉直と和順の行方を追っていることが判明する。

その後１週間して，恵蘭のもとに秉直からの手紙が届く。そこには，自分の気持ちは変わらないが，待っていてくれとは言えない，３日以内に10万ウォンを工面してくれ，とあった。恵蘭は思案の末，スマンに秉直に会わせてくれるよう尽力を頼む。そして李晋錫に５万ウォンを借りて兄の台煥（テファン）に託す。

その翌日，金を借りて立場が弱くなった恵蘭を，李は無理やりベーカー運転の車に乗せて仁川に遊びに行くのに付き合わせるのだった。ベーカーは恵蘭の歓心を買おうと努力し，彼女にアメリカ留学を勧めた。それで恵蘭もさすがに彼への警戒心を解いた。

一方，スマンは手を尽くして秉直の居所を探し，ついに秉直が彼の父親所有の元日本人所有の「敵産住宅」に隠れていることを突き止める。しかし行ってみると，応対に出てきたのは，なんと台煥で，秉直はすでに以北（北朝鮮）に向けて発った後だった。恵蘭は一縷の望みをかけて，料亭ヌニムチプに行ってみるが，秉直の行方は知れない。そこへ刑事が踏み込んできて，恵蘭も容疑者として拘留されてしまう。

４日ぶりに釈放された恵蘭は熱を出した。父は秉直のせいで娘が〈アカ〉になったと激怒した。陰暦の２月15日になっていた。ベーカーが恵蘭の見舞いに訪れ，アメリカ留学を再度勧めると，意外にも父親は承諾してくれた。秉直は38度線を越える直前に，開城で捕まっていた。10日ほどして釈放された秉直は恵蘭の見舞いに来た。まず父親に挨拶に行くと，父・寛植は，「君はモスクワに行って来たんだろ？うちの娘はワシントンにやることになったぞ」[5]と皮肉った。秉直はそれに対して，「今や我々はモスクワにもワシントンにも行くことはなく，朝鮮ですべきことが多い」[6]のだと父を説得するのだった。そして，「国粋主義者としてではなく，愛国主義者として国内で勉強したい」[7]と，抱負を語る。寛植が何を勉強するのかと，さらに詳しく聞くと秉直は，38度線が大砲でなくして貫通する方法の研究と，二つの世界が一つになって生きる道を研究したいのだと答えるのだった[8]。

秉直は初めて恵蘭にも優しい言葉をかけた。恵蘭も打ち解けて，二人で稼いで勉強したら何とかなると応じるのだった。恵蘭は翌日，ベーカーにあててアメリカ留学中止の意向を丁重に伝え，ベーカーからも将来を祝福するという返事が届いた。

以上のような梗概を見ると，優柔不断な秉直は，李光洙の長篇小説「無情」（1917年）の主人公・李亨植を彷彿とさせる。確固たる信念もなく，二人の女性の間で気持ちが揺れるが，結局，過激なイデオロギーを先立たせる和順の方は捨てて，穏健で「健全」

な恵蘭をパートナーとして選ぶわけである。これだけを見ると，この小説は極めて世俗的な恋愛譚に過ぎないようにも見える。また秉直がなぜ和順に簡単に誘惑されたのか，そしてまたなぜ恵蘭のもとへと戻って来たのかについても詳しくは書かれていない。これは確かにこの小説の弱点ではあるが，逆に，作者の廉想渉が恋愛譚の行方にはさほど重きを置いていなかったことを示しているとも言えよう。この長篇にかける廉の意識は別のところにあったと考えられるのである。この点について次節で論じたい。

III．作品の考察

「暁風」は「解放」直後のソウルを中心とする朝鮮の状況が時代背景への適切な言及とともに登場人物たちの言動を通して実によく描き込まれた作品である。しかし，本稿ではこれらを具体的に例示しながら論ずる紙幅がなく，次の2点に絞って論議したい。その一つは，この長篇の二重構造的な特徴についてであり，もう一点は，当時の時局と小説との関連についてである。

まず，人物設定上の特徴としてすぐ目に付くのは，登場人物たちがいわゆる〈善玉〉と〈悪玉〉的に二分できる点である。善玉格としては，寛植，秉直，和順らで，倫理的に潔白な人物であるか，理想に燃える一途な若者たちである。恵蘭もやや消極的ではあるが，悪には決して染まらないインテリ女性で，ベーカーも利害に関わる仕事をしていながらも，陰険なところのない，むしろ純情な青年として描かれている。これらの人物と対照的なのが，利害のみで動いている李晋錫や，その時代その時代の潮流に乗って生きることしか眼中にない朴宗烈らである。この小説にはこのほか，左派右派共に許容するマダムの金子や趙貞媛，そして左右両派に通じている姜スマンや朴ソクら政治青年も登場するのだが，これらの人物はさして重要な人物ではなく，主要人物たちによるストーリーを展開するのに必要な役割を部分的に担っているに過ぎない。

つまり主要な登場人物が，開化期小説以来の善玉，悪玉タイプに分けて設定されている点では李光洙の「無情」とも共通の手法といえる。実は廉想渉の1945年以前の長篇でも，「愛と罪」(1927-28)，「二心」(28-29)，「狂奔」(29-30)，「三代」(31)など多くの小説にも見受けられる人物設定なのである。このような善玉・悪玉設定は前近代的な小説の特徴のように映るが，廉想渉の意図は無論，勧善懲悪の鼓吹などにあるのではない。つまり，理念やイデオロギーを代表させるのにこのような明確な二分法が便利だと考えていたからである。廉の長篇小説は細部の描写は非常にリアルだが，全体的な構図は極めて観念的で，作家の主張や信念が主要人物を通して語られているケースが多い。リアルなのは世相あるいは世態風俗の描写であって，これらは主として

主要人物以外のいわゆる脇役的な人物，「暁風」で言えば，金子や張万春らの言動によって表現されている。

主要人物による理念やイデオロギーの展開と，それ以外の人物による世態風俗などのリアルな再現という，廉想渉長篇の「解放」前から見られるいわば二重構造的な特徴がこの「暁風」でも貫かれていることが確認されるのである。

次に，1947年末から48年の朝鮮半島の政治的情勢と，それの「暁風」での扱われ方について考えてみたい。その際に鍵になるのは，小説で扱われている背景の期間と実質的な執筆期間とのズレであると考えられる。廉想渉がいつ頃から「暁風」を書き始めたのかは正確にはわからないが，彼はしばしば執筆直前の状況を小説に取り入れながら書いている作家であることと，48年１月１日から連載を始めていることからすると，おそらく47年末に書き始めたと考えられる。小説が47年12月24日の話から始まっているので，ほぼリアルタイムで現実の事件などを取り込む形での連載であると思われる。問題は，この小説が48年の陰暦２月24日までで終わっていることである。これは陽暦では４月３日に相当するので，執筆終了の付記のある９月15日との間には半年近いズレがあることになる。

廉想渉はなぜ，この小説に48年９月の状況までを盛り込まなかったのだろうか。考えられるのは廉の希求するものと現実との乖離の拡大である。彼の朝鮮半島の分断状況に対する姿勢は，「単選反対と南北協商支持」[9]であった。これはつまり，金九の主張する路線であったが，前節の「時代背景」でもみたように，48年５月以降この路線は旗色が悪くなり，ついには南朝鮮だけの政府が成立してしまう。「暁風」を書き終えた９月はこの状況が決定的に固まってしまった直後であり，それだけに廉の落胆は相当大きかったと推測される。それをまともに小説に取り込んでいては，「暁風」の全体的な構図自体が崩れてしまうのである。そもそも「暁風」という題名は南北統一を期待させるすがすがしい「暁の風」でなくてはならなかった[10]。廉想渉は元来，「墓地」（改題して「万歳前」）（1924），「三代」（31），「無花果」（31-32），「驟雨」（52-53）のように，小説の内容を象徴的に示す題名をストレートに付ける傾向がある。「暁風」の場合もそうだとすれば，現実が悪化する中でのこのタイトルは命名当初とは違って，彼の苦渋に満ちた果敢ない願望を示すものでしかなくなっている。話を４月３日までで止めたのも，まさにその同じ４月３日に勃発した済州島反乱事件を取り込みたくなかったことが考えられる。話を暗くするわけにはいかなかったのである。「暁風」はストーリーが急転直下のおもむきで，あまりにも楽天的なハッピーエンドになっているところから，その終わり方が李光洙の「無情」と少しも違わないような印象さえ与えるのだが，この題名に託された作家の思いは，そう単純なものではなかったはずである。

こうしてみると，「暁風」は一見すると，当時の朝鮮半島の政治的な状況が克明に描かれた写実的な作品と見えるのだが，実は廉想渉の政治的な希求が強烈に表現された，極めて観念的な作品とも読めるのである。廉は通常，典型的なリアリズム系列の作家とみなされているが，「解放」前の長篇から一貫しているのは細部の描写や世態風俗の活写という意味でのリアリズムと，作品の全体的な創作意図の観念性という両面から検討されるべき作家であると言えよう。

では次に，既存の「暁風」に関する先行研究について検討してみたい。

Ⅳ．先行研究の批判的検討

「暁風」については前述したように，金在湧が1998年に作品を単行本化するまで本格的な論議はほとんどなされていなかった。数少ない例外が，金鍾均(1974)[11]と，金允植A（1987)[12]である。前者は「暁風」を最初に取り上げて作品の大まかな全体像を紹介したところにその意義がある。この書の中で金鍾均は「暁風」を，「解放」直後の不安と無秩序な社会を見る目は確かに肯定的な立場に立っている[13]というのだが，これは小説の内容を額面通りに受け取ったものにすぎないことは前述した。また同書では，若い男女の性問題と西欧的な流行風潮に対して，生活倫理の確立問題が志向されている[14]というが，実作ではそこまで追求されてはいない。

次に，金允植A（1987）は廉想渉とその作品に対する膨大な総合的な研究の一環として「暁風」を取り上げているのであるが，この作品も廉想渉の終始一貫した〈価値中立性〉の姿勢の元に書かれているとしている。価値中立性とは，家族関係（血筋）と日常的な生の感覚を第一に考えるので，世の中のどのような状況に対しても厳正中立主義であり，それと表裏一体をなす冷笑主義で処することを意味する[15]とされる。この見解は廉想渉の長篇小説一般についてはうなずけるのであるが，「暁風」に関してはそのままでは適用できないのではないかと思われる。なぜならこの作品には廉想渉には珍しく，状況に対する彼の希望的な願望が表明されており，決して傍観的な姿勢で書かれているのではないからである。

さて，「暁風」が単行本化された時，本格的に論議を展開したのは，この出版にかかわった当の金在湧（A 1997／B 1998）と，これに触発された金慶洙（A 1997／B 1998）であった。まず金在湧の所論を見てみよう。

金在湧A(1997)[16]は，「暁風」を再発掘しながら，この作品の特徴と意義について初めて体系的に論じている。まず金は，廉想渉の政治的な信念について，1947年までは民族国家の樹立について非常に楽観的に期待していたとする[17]。それが48年に入ると次第に現実が厳しくなったため，廉は創刊された『新民日報』(1948．2．10～5．26廃

刊）で編集局長として外勢主導の分断だけは防ぎたいとの思いから論陣を張ったが，筆禍事件で拘留され，「暁風」も連載が5月4日～9日の間，中断を余儀なくされたことに注目している。それでも廉は，外部勢力を排除した統一という信念だけは変えなかったため，「暁風」の秉直，恵蘭，寛植に彼の主張を代弁させたのだとする。この3人は廉の小説にはまれな肯定的な人物で，自己の利益より民族の未来を重視する人たちであるとしている[18]。それにしては秉直と恵蘭の実際の言動は揺れ動いていて，他の人間からの影響を受けやすい優柔不断なところのある人物として描かれている。逆に寛植は，傍観，冷笑主義的な姿勢で一貫しているが，それゆえに自ら動くことはない人物である。そうだとすると，この3人に単純に廉想渉の主張を代弁させたとは言いにくいのではないだろうか。

金在湧はまた，「暁風」の発表時期には他の作家はまだほとんど長編を書けない時期だった[19]として，文学史的な意義を高く評価しているのだが，実は中断された作品まで含めれば1945年8月～47年12月の間にも数篇の長篇小説が発表されてはいた[20]。

一方，金在湧B（1998）[21]では，廉想渉の植民地期の代表作「三代」（1931）と対比させながら「暁風」を論じている。つまり「三代」は，社会主義者と民族主義者の統一戦線である新幹会運動（1927～31年）と，また「暁風」は南北協商運動と密接な関係があるとし，「三代」は新幹会運動が悲観的になった時期に書かれた[22]としている。一方の「暁風」では，厳しい現実を目の前にしながらも，それに屈せずに現状に対する強い批判と希望を失うまいとする努力を作品で見せている[23]としている。秉直と恵蘭を確固たる民族意識の所有者として成長するように描いたのは，この現実が永遠に続くはずがないという廉の確信がなければありえない設定である[24]と言う。しかし作品を書き終える頃である48年夏以降の廉想渉に対するこのような判断は甘すぎるのではなかろうか。実作では朝鮮半島の未来に対するあまりにも楽観的な結末が唐突に示されている。この唐突さは廉が現状に絶望的になりながら，あえて果敢ない願望を表現したものであって，確信ではないと思われるのである。

金在湧の主張は概して，廉想渉の政治的信念を作品から積極的に読み取ろうとする傾向が強いが，このような側面は廉想渉文学の特質の半面であって，残りの半面はやはり当代社会を批判的に傍観しながら，その風俗図をリアルに描いていくところにあるのではなかろうか。

さて次に，金在湧の所論に触発されていち早くこれに反応した金慶洙の論議について見ておきたい。金慶洙A（(1997)[25]ではまず，廉想渉を植民地期以来，他のどの作家よりも熾烈な政治意識を小説に盛り込んだ作家だとしながら，「暁風」以降ではこの傾向が顕著に減少した[26]とする。また「暁風」では左翼の理念によってではなく，民族を

論議の踏み台にしてのみ分断を免れるという廉想渉の当時の政治意識が表われている[27]という。一方でこの長篇は，恵蘭と秉直の愛が成就していく過程を描いた作品でもある[28]とされる。しかし，実作ではこの二人の恋愛に関する具体的な成就の過程はほとんど描かれていないし，この二人は本当に恋愛をしているのだろうかとさえ思わせるところもある。それはさておき，このような政治性と恋愛譚の関係について金慶洙は，植民地期にも「青春男女の恋愛譚を同時代の社会的葛藤という脈絡の中で編みながら話の緊張を維持する」[29]という書き方をしているとする指摘にはうなずけるものがある。金はさらに，植民地期の小説では恋愛譚と〈日帝〉への抵抗は平行線で合一し得ないが，「暁風」ではこれが可能となって，秉直と恵蘭は幸せな和解で終わっている[30]としている。しかし実作では，この二人は朝鮮半島の現状と未来をめぐる議論はほとんどしておらず，秉直が一時的に左傾したのは，単に和順に魅かれたからであるかのように描かれている。二人の政治意識は実はかなり底の浅いものでしかない。それゆえ，政治意識と恋愛感情のズレに悩んだ挙句，この二つが幸いにも合一することとなったというような捉え方は粗雑に過ぎると言えよう。

また金慶洙は，和順，秉直，李東民の三人が廉想渉が期待をかけていた若者の代表である[31]というのだが，この三人はそれこそ三人三様で，急進派の左翼から左翼シンパ程度まで温度差がある。そもそも李東民については具体的な言動すらほとんど書き込まれてはいない。また廉想渉自身，左翼による国土統一を期待していたわけでもないので，この解釈は妥当性を欠く。一方，ベーカー，ブラウンという二人のアメリカ人は，外見上は朝鮮主義者あるいは韓米友好主義者だが，南北の分断を画策する厳然たる反動的な勢力なのだ[32]とされるが，この二人とも意図的に悪辣な言動をしているところはない。とくにベーカーはむしろ純情なところのある好青年として描かれており，複雑な性格付与を得意とする廉想渉の人物設定に対する認識を欠く，一方的な決め付けというほかない。

次に金慶洙B（1998）[33]でも，金慶洙A（1997）とほぼ同様の論議がごく簡略に述べられている。ここでも金は，「暁風」が廉想渉小説の中で，同志愛と個人的な愛が完璧に結合した唯一の小説[34]としているが，これはあまりに大げさな評価である。また，秉直＝中道左派的，恵蘭＝親米的性向，などと主人公らの政治的傾向を画一的に分類しているのだが，この二人の政治的な姿勢がかなり揺らいでいるのは前述したとおりである。概して金慶洙の所論はこのように読み込み不足による荒っぽい論議と言う印象がある。

次に，1998年以降のその他の代表的な先行研究二，三について見ておきたい。

まず，鄭豪雄（1998）[35]は「暁風」という題名について，民族史の新たな展開を祈る

気持ちを込めた命名だが，それは未来に対する楽観的なものではなく，もどかしい悲願に近いものだった[36]としている。これは筆者の見解と一致する。ただ鄭は，時間の背景を3月中旬までとしたのは，寒い冬から春に向かう民族史の新しい日が来ることへの期待を表明したからだ[37]とするが，これは穿ち過ぎであって，やはり状況がより絶望的になる前の時点で筆を止めざるを得なかったからだと考えられる。また，鄭は廉想渉の従来からの中道派的な立場によって，この作品でも社会主義体制か資本主義体制かという選択問題を避けて，男女3人の結婚問題の話が中心になった[38]というのだが，実作では両体制に対するそれぞれの批判が盛られており，どちらかを無理に選択するのではなく，外勢支配と民族分断だけは避けられねばならないという主張で一貫しているのである。さらに鄭は，廉想渉が当時の朝鮮の状況を悲観的に見るあまり，もともと風刺的な言語とは無関係だった廉が，寛植らに冷笑と皮肉の言語を紡がせたのだ[39]としているが，廉想渉長篇は植民地期のほとんどの作品で主要登場人物に冷笑と皮肉の言語を語らせている。廉想渉文学の大きな特徴の一つが，彼の現実批判の目と表裏一体の関係にある虚無的な冷笑主義であるとすれば，「暁風」だけが絶望的な現実ゆえに風刺的な作品になったのではないのである。鄭豪雄はまた，「解放」直後の蔡万植と対比しながら，廉想渉の方が蔡万植ほど徹底的な悲観と倫理的潔癖さがなかったので，「暁風」の結末がハッピーエンドになった[40]のだと言う。しかし，ハッピーエンドにせざるを得なかったことが逆に，当時の廉想渉の苦悩を暗示しているというのが筆者の見解である。鄭の主張は結局，廉は当時の現実を悲観的には見ているが，それが徹底的ではないために風刺と冷笑になり，またその結果，現実を避けることになったという結論になる。しかし，現実を避けるのならわざわざ「暁風」のようなテーマを選んで当時の他の作家がなかなか挑戦できなかった長篇の形で書き継いだだろうかという疑問がわくのである。

次にキム・ジョンジン(김정진) (1999)[41]について検討する。キムの見解は，1947～48年当時の廉想渉の現実認識はかなり楽観的だった[42]というものである。つまり，左右両翼を相互受容しながら合理的に対処すべきだとの主張[43]を，廉想渉自身がしていると，『白民』(1948年5月号)の廉の文章を引用しながら述べているが，この文章は朝鮮半島の政治的状況に対するものではなく，左翼理論の検討も排除すべきではなく，文学の純粋性も否認してはならぬという文学擁護を主張した文脈での発言である。キムによると，廉想渉作品は植民地期はアイロニカルあるいはシニカルであったが，「解放」後は同族社会になったので，これが一段弱まった冷笑的なユーモア程度に落ちついたのだ[44]という。しかし，植民地期の作品でも「三代」の主人公・徳基の友人の炳華の言動などは相当シニカルに描かれており，1945年以降の作品で急に廉想渉特有のアイロ

ニカルな描写が弱まったとも言えない。キムの主張のうち，対決より和合を重視する，つまり日常的な生を重視する廉想渉の姿勢が彼の中道的な視角を確保させた[45]とする見解には妥当性があるが，このことと，当時の朝鮮の状況に対する廉の認識が楽観的だったとすることとの関係は不分明なまま，何らの説明もない。

次に李甫永(2003)[46]の見解について検討したい。李はまず,「暁風」の作中時間は1948年だけでなく，1945～48年と考えてよい[47]とするのだが，その根拠は示されていない。次に李は，廉想渉が植民地期から反体制的な小説を書く一方で，ソウルの小市民や中産層の生活風俗や隠逸の精神を描くことに関心を持っていた[48]点に注目しながら,「暁風」もその流れから見ようとしているのはうなずける。但し，1947年の「三代」の改作を機に廉想渉のラディカリズムが徐々に中産層的な保守主義へと後退していく[49]と見ていることと，「暁風」では依然として廉の批判的リアリズムの精神と対話的想像力は健在であるために，保守化にはブレーキがかかっている[50]としていることとの相互関係は必ずしも明らかでない。「暁風」では確かに，「三代」での炳華のように爆弾闘争も辞さないような人物は登場しないが，イデオロギーのためには何でもするという人物を「暁風」でも登場させているところからみると，廉想渉のラディカリズムはこの作品でもまだ消滅してはいないと言えるのではなかろうか。

一方，李甫永によると，「暁風」では頻発する笑いによって緊張感がそがれているという。特に骨董品店主の李の俗物根性と，ベーカーの異国趣味の凡俗性によって作家の政治的意図がかなり損傷している[51]とされる。これは前述したキム・ジョンジンが，これらについて，イデオロギー批判や人物批判や社会否定的な批判をするためのユーモアとみなしたのとは正反対の見解である。この作品ではこれらの〈笑い〉が深刻な政治局面に関わる話に，適切なスパイスとして作用していると見るべきで，否定されるようなものではないと考えられる。

次に，李甫永の論議の中での題名「暁風」の解釈について触れておきたい。李によると，この題名には作家の「民族の将来と関連した切なる希望，自嘆，自虐，自己警告のつらさが深く含蓄されている」[52]とされる。これ自体は概ね妥当な指摘であるが，これは厳密には連載終了に近い時点での廉想渉の思いを代弁するものであろう。作品の題名というものは連載直前には決っている性質のものであるから，連載直前の47年末の時点では，左右合作による国土統一に対して廉ももう少し楽観的・希望的な観測を持っていたはずである。題名からはやはり命名された時点での作家の意図を読み取るべきであろう。

それでは最後に，最も新しい金允植B (2004)[53]について若干，コメントしたい。金允植A (1987) でも明らかなように，金教授の見解は，廉想渉の植民地期の長篇から

一貫して続いている価値中立性（厳正中立主義）が「暁風」でも貫かれているというもので，「解放空間」（1945～48年）での廉想渉の言動はあくまで左右の政治路線からは中立的だった[54]とされる。しかし前述したように，左派の新聞であった『新民日報』は南朝鮮だけの総選挙実施に反対する立場を明らかにし，この新聞社で主筆兼編集局長だった廉想渉自身が48年４月28日には検挙され[55]，そのため「暁風」の連載も一時中断しているのである。また，この長篇が掲載されていた『自由新聞』は一応中立系ではあるが，「進歩的民主主義」路線も許容する新聞で，共産党とともに朝鮮の国連信託統治案に賛成の立場を取ったため，46年５月14日以降，右翼青年団の襲撃を都合５回受けている[56]。その後，同紙は1946年10月27日に申翼熙が社長となってからは，右傾化したという[57]。このようなことから，「暁風」連載当時の廉想渉が政治的に中立で傍観的な態度を取っていたとは考えにくいのである。むしろ金在湧が指摘するように，この時期の廉は左右の合作路線を言論でも実作でも熱心に主張していたわけで，左・右のバランスを取るという意味では中間的だが，そのこと自体が一つの立場を占めているので，決して中立的ではないのである。金允植によると，廉想渉は全生涯にわたって中産層の保守主義という基本路線を歩んだ[58]とされるのだが，「中産層」に対する厳密な定義が欲しいところである。金教授の論理からすると，政治的中立主義ゆえに「中間派知識人の新聞記者を主人公とする「暁風」」[59]という位置づけになるのであろうが，緻密な人物形象がなされていない秉直を主人公とすることにも無理がある。

Ⅴ．小結

「暁風」の分析を通じて浮かび上がる問題点は多岐にわたる。結局，廉想渉は「暁風」連載時に朝鮮の時局に対して悲観的だったのか，それとも楽観的だったのかという点，主人公格の恵蘭，秉直らはエリート知識人なのか，それともただの小市民なのかという点，また，そもそも「暁風」を始めとする廉想渉の長篇小説は，リアリズムを主としているのか，あるいは理念型を重んじているのかという点などである。これらの点は「暁風」一作に止まらない廉想渉長篇小説全体の特質を究明する上での重要なポイントとも言える。

このような諸点については到底，本稿のような小論ですべて結論が出るようなものではなく，今後少しずつ解明していきたいと考えている。最後に本章で検討した範囲内で明らかになったことどもについて簡略にまとめておく。

まず第一点は，登場人物たちが〈善玉〉〈悪玉〉的に二分化して形象されていることである。この二分法は廉想渉の植民地期に発表された長篇小説以来，しばしば用いられている人物設定で，これによって作家の理念やイデオロギーをより鮮明に描き出そ

うとする特徴が「暁風」でも見られる。このような全体としての観念的な構図の上に，当時の世相ないしは世態風俗の細部にわたる描写が徹底的に写実的な手法でなされている。しかもこれは，主要登場人物よりもむしろ脇役的な人物の言動に，よりリアルに示されているのである。

次に第二点として，執筆時期と作品の背景時間との半年ほどのズレの問題がある。「暁風」という題名にも象徴的に示されているように，執筆直前の廉想渉は外国勢力を排除した南北朝鮮の統一に希望的な観測を持っていたが，その後の半年で現実の情勢が極めて悲観的になったため，それをすべて小説に取り込めなくなり，1948年4月初めの時点で区切って大急ぎで小説を結んだ。その結末は朝鮮半島の未来に楽観的なものとなっているが，これは廉想渉の悲痛な希求を示したものであって，執筆終了時である48年9月当時の廉の確信を示しているものではないと考えられる。

以上の2点の提示をもってひとまず擱筆したい。

註

1）単行本『暁風』（実践文学社，1998年）の凡例によると，新聞連載当時の明らかな誤字は訂正し，綴り字等は原文の意味と語感を損なわない範囲で現行のものに直してあるという。なお，本稿では便宜上，すべての朝鮮語文は日本語訳（筆者試訳）で示すこととする。

2）廉想渉『暁風』，実践文学社，1998年，p.117.

3）上掲書，p.118.

4）同上，p.125.

5）同上，p.335.

6）同上

7）同上

8）同上，p.336.

9）金在湧「8.15以後廉想渉の活動と〈暁風〉の文学史的意味」『韓国文学評論』，1997年夏号，p.194.

10）廉想渉は「暁風」連載直前の「作家の言葉」の中で，「暁の風は冷たくてめまぐるしいけれども，夜明けの黎明は希望の光でもあり，ゆうべの疲労と悪夢を洗い流してくれる新しい力の幹でもある」として，「解放朝鮮」の現実は厳しいけれども，顔をしかめて座視したり，一時の興奮に駆られて精力を浪費してはならないと述べ，希望を持って難局に冷静に立ち向かうことを読者に訴えている。（『自由新聞』1947.12.28.）

11）金鍾均『廉想渉研究』，高麗大学校出版部，1974年

12）金允植『廉想渉研究』，ソウル大学校出版部，1987年

13）金鍾均：前掲書，p.221.

14）上掲書，p.289.

15）金允植：前掲書，p.821.（大意）以下，「 」のない引用部分はすべて大意である。

16）金在湧；前掲（註9）論文。この論考を，単行本『暁風』の巻末解説としてほぼそのまま再録している。

本稿では以下の関連言及は，この再録された『暁風』解説による。

17) 金在湧：前掲書（註２）の解説，p.345.

18) 以上，上掲書，pp.359～361.

19) 上掲書，p.366.

20) たとえば，金南天「一九四五年　八・一五」(1945.10.15～46.6.28 まで確認)，朴鍾和「民族」(近代篇)(1945.11.5～46.7.22.)，李泰俊「不死鳥」(1946.3.28～7.27. まで確認)，金南天「動脈」(『大河』第二部)(1946.7～47.6.)，朴鍾和「青春勝利」(1947.9.1.～12.27) など。

21) 金在湧「廉想渉と民族意識」，文学史と批評研究会編『廉想渉文学の再照明』，セミ，1998年　所収

22) 上掲書，p.112.

23) 上掲書，p.120.

24) 同上

25) 金慶洙「混乱した解放政局と政治意識の小説化――〈暁風〉――」『外国文学』，1997年冬号，(金慶洙：前掲（註10)『廉想渉長篇小説研究』所収（第７章)，本稿では同書に拠った。)

26) 上掲書，p.198.

27) 上掲書，pp.217～218.

28) 上掲書，p.199.

29) 上掲書，p.218.

30) 上掲書，pp.218～219.

31) 上掲書，p.200.

32) 上掲書，p.212.

33) 金慶洙「廉想渉長篇小説の詩学」，前掲（註21)『廉想渉文学の再照明』所収。

34) 上掲書，p.66.

35) 鄭豪雄「廉想渉の〈暁風〉論――冷笑と諷刺――」『実践文学』，1998年12月

36) 上掲論文，p.238.

37) 上掲論文，p.239.

38) 上掲論文，pp.241～242.

39) 上掲論文，p.246.

40) 上掲論文，p.248.

41) キム・ジョンジン「〈暁風〉の人物形象化とその技法」，金鍾均編『廉想渉小説研究』，国学資料院，1999年　所収

42) 上掲書，p.266.

43) 上掲書，p.267.

44) 上掲書，p.271.

45) 上掲書，pp.292～293.

46) 李甫永「過渡期的知識人像の創出《暁風》」『廉想渉文学論』クムムン（금문）書籍，2003年　所収

47) 上掲論文，p.269.

48) 上掲論文，p.270.

49) 同上

50) 上掲論文，p.271.

51) 以上，上掲論文，p.281.（大意）

52) 上掲論文，p.289.

53) 金允植「証言としての小説――廉想渉論――」『20世紀韓国作家論』，ソウル大学校出版部，2004年 所収
54) 上掲書，p.60.
55) 尹壬述編著『韓国新聞百年誌』，韓国言論研究院・発行，1983年，p.573.
56) 上掲書，p.480.
57) 「『解放空間新聞資料集成』を出すにあたって」『自由新聞 1』,ソンイン文化社，1996年，巻頭の解題による。
58) 金允植：前掲書（註53），p.60.
59) 同上

第２章　朝鮮戦争期の短篇小説について

Ⅰ．はじめに

筆者はこれまで朝鮮戦争期（1950年６月～1953年７月）に作品を発表した女性作家[1]と女性従軍作家[2]の作品についての考察をすすめてきた。そこで本稿では，同時期に創作活動を行っていた男性作家であり，さらに戦争当時，海軍に入隊していた経歴のある廉想渉の作品を取り上げることにする。

廉想渉は朝鮮近・現代文学史において代表的な「自然主義作家」または「リアリズムの作家」として評価され[3]，確固たる存在感を示してきた作家の一人である。加えてその作家人生において，長篇28篇，短篇148篇，評論100余篇，雑文246篇[4]を残すなど，多作の作家としても知られる。そのなかでも，短篇148篇のうち113篇は1945年の解放以後に書かれたものであるということは注目される[5]。ただ，これら多数の作品の中で研究対象となってきたのは「解放」（1945年）以前に発表されたものが中心であり，特に長篇に関心が集まっている感がある。1950年代の作品についてみても，長篇である「驟雨」[6]のみが考察対象となっている場合がほとんどである。

戦争という未曾有の極限状況の中でも，平常時と変わらないさまざまな欲望のような人間的本能が中心に描かれたこの「驟雨」という作品は，同時期に発表された他の作家の戦争期作品の中でも異質のものとして注目され，その異質性ゆえに評価されてきたといえる。しかしこのことは逆に，「驟雨」が戦争期に書かれていなければ，それほど注目される作品ではなかったのではないかという疑念を抱かせもする。ともかく，廉想渉の50年代の作品についての評価は，この「驟雨」に代表される異質性についての論議に集約されている感がある。

ところで前述したように，「解放」以後に数多くの短篇小説を発表するようになった廉想渉は，戦争期にもすでに多くの短篇を執筆していた。同時期における長篇が２篇であることから[7]，廉想渉の創作活動の中心は長篇よりもむしろ短篇小説にあったことがわかる。戦争期ひいては50年代の廉想渉の文学を考える際に，これら短篇の考察は不可欠であるといえる。少なくともこれまでの研究のように「驟雨」一篇のみに着目しての考察では，廉想渉の戦争期文学の全体像を捉える上で限界があると考えられる。

そこで本稿では，朝鮮戦争期に書かれた短篇小説を考察対象とし，これらを整理しながら作品の特徴を明らかにすることを研究の目的としたい。考察対象とした作品を発表年代順にあげると以下の通りである。

「解放의 아침」(解放の朝),『新天地』6巻1号,1951.1
「탐내는 하꼬방」(欲しがるバラック小屋),『新生公論』,1951.7
「산도깨비」(山トッケビ),1951.7 (初出不明)[8]
「거품」(泡),『新天地』7巻2号,1952.3
「欲」,1952.9 (『まだらの時代風景』,正音社,1973.所収)
「새 設計」(新しい設計),大韓金融組合連合会編,『農民小説集』,1952

以上にあげた6篇の考察を通して,朝鮮戦争期における廉想渉の作品がもつ特徴について捉えていきたい。具体的な検討の方法としてまず,海軍体験の作品創作との影響関係あるいは関連性について検討する。次に戦争期の女性従軍作家やその他の女性作家の作品の特徴との対比を通して,戦争に対する認識や,内容及び登場人物の描写における特質を明らかにしていくことにする。

II. 海軍入隊の動機と海軍体験

1950年6月25日に朝鮮戦争が勃発したとき,廉想渉一家はソウルから避難することができず,6月28日のソウル陥落後,9月28日にソウルが奪還されるまでの3ヶ月間を北朝鮮側の朝鮮人民軍統治下で過ごさなければならなかった。その後も戦況は一進一退を繰り返し混乱を極めていたのだが,そのような状況のなかで,廉想渉はどのように過ごしていたのだろうか。それを知る手がかりに以下のような彼の回想文がある。

> 1950年10月××日。日差しがぽやけて天気は肌寒い。それでもまだ戸を開けて過ごせる。私はすることのない人のようにぼんやりと日が落ちていくのを見ているだけなのが退屈で,この虚脱を埋める慰めの手段として古本の中から手に取るままに『マノン・レスコー』を開いて時を過ごした。日本語訳で『青春行』といったらしいが,いわばこんな時にこんな気分で『春香伝』を読むわけだから,とにかく頭を使わず力のいらない暇つぶしの種だ。暇つぶしの種とは,文学に対してはすまないことだが,このようにすべてのことがガランと空いている時は仕方がない[9]。

以上のような文面からは,戦時期という緊張感は微塵も感じられない。暇つぶしをしなければならないほどのあり余った空虚な時間と,それに伴う虚脱感をもてあましていた廉想渉が,そうした状況の中から這い出すきっかけをつくったのが作家李無影であった。彼が廉想渉を訪ねてきた目的は,奪還されたソウルの地で政府機関紙である×新聞の首脳部を入れ替えて,代わりにその仕事を引き受けようというものであっ

た。元来，長い間記者として新聞社に勤めていた経歴のある廉想渉にとって，この誘いは魅力的なものであったろうと推測される。

しかし彼は逆に，従軍記者となって軍とともに北上し，北の地で新たに新聞社や雑誌社を作ることを李無影に提案したのである。つまり軍への入隊は廉想渉自身が望んだことであり，極めて能動的に行われたものであったのである。ただしその動機はどこまでも廉想渉の新聞社へのこだわりに由来するものであり，そこに戦争自体に対する積極的な参与の意図などは認められない。結局，李無影がたまたま海軍将校と知り合いだったこともあり，作家尹白南を加えた3名が海軍に入隊することとなったのであるが，それが陸軍であっても空軍であっても廉想渉には問題にはならなかったのである。いわば自身の記者そして作家としての欲求を満たすために，軍を利用しようとしたに過ぎないのである。

このような「不純」な動機による海軍入隊は，やはり実際の海軍生活においては大きな支障をきたす結果をもたらしたようである。当初，海軍当局は政訓局[10]を強化する計画で社会的にも著名な3作家を最初から現役文官に任命するつもりであったようであり，彼らもある程度そうした待遇を期待していた。しかし，実際の軍の組織というのは特殊な社会であり，3作家が考えているほど甘いものではなかったのである。結局彼らは現役将校になるべく，1950年11月30日に海軍士官学校特別教育隊に入隊し，一ヶ月半ほど若い候補生たちとともに軍事訓練を受けたあと，45日間の見習い士官訓練を経験することとなるのである[11]。

海軍士官学校特別教育隊の同期生であった尹一柱はのちの回想のなかで，若い訓練生たちの中での中年の小説家士官候補生であった廉想渉，李無影，尹白南が異色な存在であったことを述べている。その中でも特に廉想渉は融通がきかずによく失敗することがあり，相当な過失点を累積し，若者たちから悪意ないからかいを受けていたと回想する[12]。

一方，この海軍生活について廉想渉自身は戦争当時，「軍人生活が別天地だとか，肌に合わないということはなかった」[13]とし，その理由として兄が日本の陸軍の士官候補生であったことから，兄を頼って日本に渡った自分もそこで軍国主義日本の軍事教育を受け，実弾射撃や機動演習も経験したことがあると語っている。つまりその時の経験が今に活かされているというのである。このように尹一柱の回想とは正反対に，軍での生活に適応していることを強調するような内容となっているのだが，その一方で「(前略) 少なくとも10年さえ若かったら—という嘆きが何度口から出てきたことか，軍人は若いうちにすること，また軍人精神の発揚なく強兵ではありえず，体力の頑健なく同様に真の軍人であることの難しさを悟った」[14]と吐露していることは注目され

る。軍隊における自分の存在の異色さと，真の軍人たりえない自身の限界を十分に痛感していた廉想渉だったからこそ，強がりともとれるような，軍隊生活への潜在的な適応能力を強調する必要があったのかもしれない。

ともかくも何とか訓練期間を終えた3作家は1951年3月1日，廉想渉と李無影は少領（少佐相当）に，尹白南は中領にそれぞれ任命された。この階級についても尹一柱は意外なことだったとし，その理由として「先生方は大領が約束されていると思っていたからだ。海軍の階級査定はけち臭い」[15]と述べるなど，訓練内容や期間を含めて当初の予定とはかなり異なる状況が海軍の中で起こっていたことを暴露している。つまり，海軍を利用するつもりで軽い気持ちで入隊した廉想渉らであったが，現実はその逆で，海軍に利用される立場にあったという皮肉な結果をもたらしたのである。

その後，廉想渉は尹白南とともに海軍本部政訓監室に赴任後，51年4月1日からは3作家とも海洋生活に入り，同月18日まで62艦で従軍した[16]。海洋生活を終えたあと6月1日からは海軍本部政訓監室での生活が始まり[17]，同年10月には編集局長に任命され，52年7月からは指導課長を兼任した。以後，ソウル還都が成されると53年10月16日附で海軍本部ソウル分室政訓室長として赴任し，同月29日には中領に進級した。この間に廉想渉は1954年5月10日に除隊するまで，従軍記章及び大統領表彰をはじめとした殊勲賞を受けている[18]。

以上のように廉想渉の海軍生活は約3年に及んだわけだが，この海軍体験が廉想渉にとってどのような意味を持つのかという問いに対しては否定的な見解が多い。尹一柱は「考えてみると3年を超える海軍生活に，先生はさほど愛着を感じていらっしゃらないようだ。乗艦されたこともあったと聞いたが，海軍を素材にした戦争小説がひとつもなかったことが，その時や今でも私としては不満といえば不満である。」[19]と述べている。この他にも「海軍現役生活3年というのは作家廉想渉にはなんの意味もなかったというほかない」[20]という見方や，「非常に意欲的なところから始まり後悔に終わったのが彼の海軍生活であった」[21]という意見等が主流を成している。これらの見解はやはり，廉想渉の戦時，戦後の作品に海軍生活の痕跡や成果が反映されていないということに由来しているようである。

次章ではこうした問題も踏まえ，海軍体験と創作活動との相関関係にも着目しながら，作品を考察していくこととする。

Ⅲ．作品考察

1．作品内容の概観

ここではまず，6作品の内容について発表年代順に紹介し概観することで，廉想渉

の朝鮮戦争期短篇小説の大まかな特徴を捉えていくことにする。

(1) 「解放の朝」

1950年9月28日の朝，激しい銃撃戦の末，ソウルが解放されたということを知ったイニムは，それまでの恐怖から解放されやっと少し安心していた。しかしその後，向かいの家に住むソンシルの両親が警察に連行され，イニムの家にまで青年団の団員が数人訪れた。彼らによって，鍵がかけられて使っているはずもない離れの部屋から米や木綿などが発見されたことで，イニムの家にも「アカ」の疑いがかけられ連行されてしまった。身に覚えのないことで驚きと怒りを感じるイニムであったが，工場の女性同盟委員長をしていたウォンスクの母が工場の委員長と組んで食糧を盗んで隠していたその罪を，イニムの両親になすりつけようとしていた事実を知る。彼女は取り調べでその事実を暴露し，そこに遅れて青年団幹部である兄も現れイニム家族は無事釈放された。イニムの父はウォンスクの母が委員長であったことを暴露したことで彼女を死刑にしてしまうことに後ろめたさを感じていたが，そんな父に対してイニムは「それじゃあ，彼女らを助けて自分たちが死んでもいいの！」[22]と言うのであった。

(2) 「欲しがるバラック小屋」

朝鮮戦争勃発以後，ピルジュン一家は避難地から再びソウルに戻ってきたもののほとんどの物を売ってしまい，何とか生き延びるために得たのが「バラック小屋」だった。ジンスクには年頃の息子もなくピルジュンも30を過ぎていたため徴集などはないだろうと安心していたのだが，ある日突然，ピルジュンは人民軍に連行されてしまった。それは隣人で，班長や「バラック小屋」を含めた営団の家を管理している「アカ」のパク・イルソンがバラック小屋」を手に入れるために仕組んだ策略だと察したジンスクは，彼ら夫妻に嫌悪感を抱いた。夫もいなくなり，3人の子供をかかえて途方にくれるジンスクに，夫妻は「バラック小屋」を売ってくれと執拗に言ってくるのだが，彼らがこのように金儲けに走っているのはもうすぐ韓国軍が入ってくるという噂の信憑性を裏付けるものでもあった。

そうした中，ピルジュンは爆撃の混乱に紛れて脱走し戻ってきた。「バラック小屋」には畳一畳の下に人一人がやっと入れる程の秘密の地下室があったのでピルジュンはそこに隠れて過ごすことにしたのだが，その異変に夫妻が気付き始めた。一人でうどん屋をやっていくのにも不安があったジンスクは「バラック小屋」を売ることを考え始め，夫と相談したその翌朝，パク・イルソン夫妻とともに内務署員がやってきた。家の点検を始めた彼らによって，地下に隠れていた夫はとうとう見つかり再び連行さ

れてしまった。2日後，家は内務署のものとなり，国連軍が入ってくるまで門が開くことはなかった。

(3) 「山トッケビ」[23)]

戦禍のソウルから苦労して避難してきたヨンイの家族は，12月3日頃仁川にたどり着いた。人民軍が後退したという噂はあったものの，まだ安心できない状況ではあったがヨンイの母は仁川にとどまっているよりもソウルに戻ることを決め，10家族を引き連れて寒く人気のない山中を歩き始めた。避難した頃からヨンイ一家のなかでは，家族の中で誰かが父の夢をみるといいことがあるというのが信条になっていたが，その日もそうだったことがヨンイ一家を心強くさせていた。しばらく歩いていると家があって，少し休ませてもらおうとしたが断られてしまった。仕方なくその向かいの家に向かった時，飛行機の爆撃の音がして，ついさっき自分たちを追い出した家が爆撃されたのを知ると，皆やはり父の夢のおかげで運が良かったと思うのである。

少し休んで再び歩き出した一行は水原をかなり過ぎた辺りで，山トッケビの仮面を着けた2人の人民軍兵士に捕まってしまった。兵士は一人一人の顔を調べて，ヨンイの姉を連れて行こうとしたのでヨンイの母は抵抗した。その時飛行機の音がして，兵士が山の方に逃げて行ったすきに，一行はまたソウルへの道を急いで歩き始めるのであった。

(4) 「泡」

イ・ジョングは陸路で避難した妻ボンヒと娘の所在を知るため，避難民連絡所に行ってみたが何の情報も得られず無駄足に終わった。しかしジョングはそこで妻の友人であるスギョンと，昔の同僚で少しいい仲であったヘランに会った。昔の美しい姿を記憶にとどめていたジョングは，変わり果てたヘランの姿に驚いた。子供を生み離婚して，朝鮮戦争を経験したヘランは疲れ果てた顔つきになってしまっていた。そんな自分をジョングが見てすぐにわかってくれなかったことにショックを受けたヘランは，ジョングと結婚していればこんなことにはならなかったのではないかと，今更ながら後悔したりもするのであった。

一方スギョンは，行方不明になっている友人ボンヒのことをよく当ると評判の占い師に聞いてきてあげると約束し，後日一人でジョングを訪ねてきた。占いの結果を知らせに来たというのは口実で，その本心は何かよい就職口でも紹介してもらおうというものであった。それを察したジョングは不愉快な気分となり，スギョンに餃子スープをご馳走し，占い料を払って縁を切ってしまおうとするのであった。

(5) 「欲」

父の祭祀（法事）を控えて，70歳近い母は子供のようにその日を心待ちにしていた。その母の期待に応えるためにも，チョルは避難民の苦しい生活のなかで大事にしていた時計を売るなどして準備をした。チョルの姉は地方官吏の夫が先立ったあと，３年も経たずに再婚して今は雑煮屋の手伝いをしていたが，餅一つ持ってこないこの娘に対し母はいつも不満を持っていた。父の祭祀の日，姉は娘を連れてやってきたが母に嫌味をいわれて，祭壇の亡父におじぎもせず帰ると言い出した。しかしチョルが酒を買って帰ってくると，姉は離れの部屋にいる金先生の部屋に上がりこんで笑い声をたてているのであった。チョルは姉のその笑い声に淫蕩なものを感じ，姉の変わり様を皮肉った。そのうちとうとうチョルの言葉に腹を立てた姉は，娘を連れて出て行ってしまった。その後，お供え物は５人家族がやっと食べられるだけの量しかなかったため，金先生には声をかけずに祭祀を始めた。そのことに腹を立てた金先生は，仕返しの意味でチョルの祝詞の間違いを指摘するなどしてチョルと言い争いになってしまう。

(6) 「新しい設計」

種まきをしてから雨が降らず日照り続きではあったものの，金区長の畑は野原を流れる水のおかげで何とか芽を出していた。一方，パク・チュンシクの畑は海側にあったため海水が流れ込み，芽は出たもののだめになってしまった。８人家族が飢えに苦しみ，チュンシクは金区長のもとに麦を分けて欲しいと頼みにやってきたのだが，金区長はチュンシクが水を汲み上げる作業を手伝わなかったことを非難し，その要求を断る冷たい対応をした。２人のやりとりを聞いていた金区長の息子ジュンテクは，同じ傷痍軍人であるチュンシクの息子ウィヨルのことを思って父を責めもした。戦争を経験してから物事を根本的に考えるようになったジュンテクはウィヨルのもとを訪ね，これからは若い自分たちが中心になって改革していかなくてはならないということを話し合った。

そして，チュンシクがハン・ベクホからの借金返済のために娘のウィスンをベクホの妾にするという計画があることを知ったジュンテクは，義足をつくるために父親がくれた金をウィヨルに託し，新しく生活を始めるための資金にするようにすすめるのであった。ウィヨルはその金を無駄にすまいと誓い，ジュンテクは農村で一生働いていくことを決意し，着ることもないであろう紳士服と金時計を質に入れて，その金で義足を買えばウィヨルも気兼ねなく金を使えるだろうし，父親からも小言を言われないだろうと考えるのであった。

以上のように6篇の作品内容を概観することでまず気付くことは，当然のことながら6作品全てが戦争期を背景にしているということである。つまり作品が書かれたまさにその時代が作品の舞台となっているのである。これは朝鮮戦争期の作品そのものに特有のことではなく，廉想渉小説全般における特質の一つであるようである[24]。

次に注目される点はやはりその内容において，戦争期を舞台にしながらも実際の戦闘状況や兵士，あるいは軍だけを描いた作品がないということである。このことは前述したように，作家廉想渉にとっての海軍体験の無意味さを証明することのようでもある。確かに6作品を通して海軍将校，あるいは従軍作家としての廉想渉が描く戦争そのものの姿は発見できない。しかしながら，6作品全ての時代背景が戦争期であるため，戦争の姿はやはり確実に彼の作品に描き込まれているのである。とするならば，一作家，人間としての廉想渉が描く戦争とはどのようなものなのであろうか。次に彼の戦争観，戦争像について具体的に考えていくことにしたい。

そしてさらに，廉想渉の戦争期作品の重要な特質として，その女性描写を挙げることができる。作品に登場する女性たちの多くは，戦争によって様々な苦労を強いられるなか，女性であることを利用して生き抜いていこうとするのであるが，そこには廉想渉の女性たちへの冷ややかな視線が感じられるのである。ここには廉想渉の持つ女性観というものが強く反映されているのではないかと考えられる。

以上，これら2点の問題について次節で考察していくことにする。

2．廉想渉の戦争認識

前述したように朝鮮戦争が勃発した時，避難できずに「敵治」下のソウルで3ヶ月を過ごすことになった廉想渉であったが，その当時のことを背景に描いたのが「欲しがるバラック小屋」である。この作品では共産軍統治下のソウルで夫不在のなか，3人の子供を抱えたジンスクと「アカ」の隣人との確執が，日本式家屋である「バラック小屋」を中心に描かれている。「アカ」であるパク・イルソン夫妻は悪人のように描かれるものの，その描写において廉想渉の強い反共意識を感じさせるものではない。それよりも敵治下の厳しい状況において，人々の抱く緊迫感や危機感などの描写に，より力点が置かれている。

この作品に対する評価は一様に，「戦争の理念や意味などが介入する余地はなく，関心は「バラック小屋」に象徴される金とそれを間にした人間の欲におかれているだけ」[25]というように，作品名にもなっている「バラック小屋」が象徴する物質に対する人間の欲が中心となって描かれていると見なされている。このように廉想渉の文学における，金を取り巻く人々の葛藤の問題について言及したものは多い[26]。確かにこの作

品において戦争そのものが語られることはなく，むしろ戦争とは直接関係ないようにみえる「バラック小屋」のもつ意味は大きな比重を占めている。ただ，この「バラック小屋」が単に金を象徴するものであるという見解には慎重にならざるをえない。なぜなら，ジンスクがこの「バラック小屋」に執着する理由は，金や物質的な利益のためである以前に，より根源的な「生きる」という問題に直接的に関わっているためである。全てをなくした状態での敵治下のソウルで手に入れた「バラック小屋」は，生きていくために必要不可欠な場である。すなわち，戦争が死と連結したものであるからこそ「バラック小屋」は大きな意味を持ちえたのであると考えられる。「廉想渉にとって金は決して生の目的ではない」[27]という指摘もあるように，この作品で描かれているのは「バラック小屋」が象徴する金への執着ではなく，むしろ戦争下で生きぬくことへの執着であったといえる。

この生きることへの執着というテーマは，この他の作品においても見出せるものである。1950年9月26日に国連軍がソウルを取り戻した，いわゆる「9・26収復」直後の釜山を背景にした「解放の朝」では，収復後に始まった反逆者問題が扱われている[28]。少女イニムが幼いながらも，自分が生き抜いていくために隣人であろうとも容赦せず密告する姿には，生きることへのより強い執着を感じさせるものがある。

またこの作品では，人民軍からの解放を迎えながらも，父たちのように感動することもなく，日本からの解放の時のような飛び跳ねたいような気持ちの高揚のない，どこか冷めた感じで描かれているイニムの心理にも注目される。激しい銃撃戦の恐怖に耐え，解放の喜びに道に飛び出したイニムは，倒れた兵士の死体ひとつなく，血のあと一滴すらないその光景を意外なものととらえ，「—これが戦場なの？」[29]と間の抜けたような気さえするのであった。これは多くの人々にとって，戦場には流血，死体など日常にはあり得ない惨劇の跡がつきものであるというようなイメージの先行，極端に言えば期待のようなものすら存在することを代弁している。期待はずれな戦場を目の当たりにした少女の驚きは，まさに廉想渉の驚きであり，彼はこの作品を通してその「期待」を裏切る戦争現実の存在を描いたのではないだろうか。

次に避難の行程と避難地での，生きることへの執着を見せてくれる作品として「山トッケビ」と「泡」，そして「欲」が挙げられる。「泡」では避難途中での家族離散の問題が扱われているが，その内容においては戦況下での女性の変貌に対する男性のとまどいや驚き，不快感が中心に描かれているといえる。同様に「欲」でも戦争によって変わってしまった姉に対する，主人公チョルの軽蔑に近い感情が中心に描かれている点が注目される。それゆえこれらの作品については，次節で廉想渉の女性観を探るなかでもう少し詳しく考えることにする。

一方「山トッケビ」は廉想渉一家の自伝的小説といえる作品であり，家族が群をなして京畿道にいる廉想渉の兄弟の家に避難する光景をもとにしている[30]。このような廉想渉家族の避難体験は，これが初めてのことではなかった。廉想渉は1936年に満鮮日報社に赴任することになり，翌年には家族も呼んで旧満州に移り住んだのであるが，1945年の終戦によって旧満州を脱出することになる。その当時の満州国の混乱は名状しがたいものであり，彼ら一家の避難は相当に大変なものであっただろうと推測される。このような事実から金允植は，満州脱出以来，廉想渉一家には避難民意識が染み付いていると指摘する。この避難民意識のため，朝鮮戦争期における何度かの避難行脚も，彼らにとってはなじみのないものではなかったというのである[31]。

避難行程の描写が中心となったこの作品において特に注目されることはまず,「知識人たちの避難体験で最も切実であったのは,やはり食べていくという問題であった」[32]という事実を反映して，食糧の問題に対する心配が強調されていることである。これはまさに生死に直結する問題である。そして，避難途中で何体かの死体を目の当たりにした彼らであったが,「敵軍の死体を見て残酷だとかかわいそうだという考えよりも,自分は生きているという意識がはっきりとするのであった」[33]と述べられていることなどは，廉想渉の生きるということへの意識の強さを感じさせるものである。

またこの作品では人民軍兵士が白い「山トッケビ」の仮面をつけていることで，生身の人間というよりも童話などに登場する空想上の生き物のような存在として描かれていることも特徴的である。このような描写は廉想渉の反共意識を感じさせるものではない。むしろ実体験に基づいた現実的な避難行脚が，この「山トッケビ」の登場と彼らからの偶発的，奇跡的な解放によって非現実的な色合いを帯びたものになってしまっているといえるのである。このように廉想渉が，敵軍からも勇敢に堂々と脱出する家族の姿を描く意味を，金允植は「38度線を越えた実力を積んだ家族だという自負心」[34]に見出している。そうだとすると廉想渉にとって朝鮮戦争は，満州脱出という彼にとっての大事件の延長線上に捉えられる性質のものであると考えられるのではないだろうか。

以上で見てきた作品のなかでは趣を異にするのが「新しい設計」である。この作品が掲載されたのが『農民小説集』であるためか,「農村も若い人の力で動かさなければならない時代がきた」[35]として,農村で新しく若い力を活かして生きていこうとするウィヨルとジュンテクの姿が中心に描かれた農村啓蒙小説といえる。また，積極性がなく利己的な親世代を批判し，戦争で変わってしまった村と人々を嘆きながら，一方でジュンテクのように戦争体験を通して成長し，物事の本質を捉えるようになる若者を描いているという特徴がある。農村の啓蒙が目的で書かれた作品であるにせよ，この

ように戦争によって人間的に成長した人物が描写されるというのは，廉想渉の他の戦争期作品には見られないものとして注目される。

しかしながら，戦争を通したジュンテクの成長というものが具体的に描かれることはなく，それどころか戦争に対するジュンテクの心理や意識などは全く示されていないという問題点も指摘できる。このことから，ジュンテクの戦争を通した成長というのは，この作品においてさほど意味をもたないものであると考えられる。このジュンテクの戦争体験と成長は単に当代社会を反映しているという範囲内でのみ，捉えるべきものであろう。

以上のことから，廉想渉の戦争観，戦争認識についてうかがえることは，戦争という「事件」そのものに対する冷めた視角の存在である。廉想渉は戦争期に，朝鮮戦争と文学についての自らの見解を以下のように述べている。

> 昨今民族文学も正常な軌道に入り，一歩前進の旅支度をととのえている。6・25(朝鮮戦争のこと。筆者註）の悪夢のような一時の紛擾などは問題にもならない。むしろ民族統一，民族精神の強靭でたゆみない団結力でもって民族文学は今後一層活発に新境地を開拓し，勃興する機運に際(ママ)会した[36]。

ここにはっきりと示されているように，朝鮮戦争は「悪夢のような一時の紛擾」であり「問題にもならないもの」と見なされている。35年に渡る植民地体験[37]と満州での生活，そしてそこからの命がけの脱出等，その人生において幾多の試練を経験してきた廉想渉にとって，朝鮮戦争はこれら一連の社会的事件，困難の延長線上にあるものと考えられる。彼にとっては避難体験と同様に，戦争のような極限状況も決してなじみのないものではなかったということである。

そして作家廉想渉にとって最も重要であったのは，解放によってやっと自分たちの文学を自由に開拓していくことのできる世界を得たことである。1945年の解放から朝鮮戦争が勃発するまでの，いわゆる「解放空間」と呼ばれる時期の解放文壇の状況は，左右両派の文学理念が対立を深め，先鋭化していた。左翼系の作家たちは「政治・社会参与の文学」を，右翼系の作家たちは「純粋文学」をそれぞれもとにした民族文学の確立を目指していたのである。こうした文壇の対立構造のなか，左右どちらの理念に対しても反論せず，また賛同もしない「中間派」と呼ばれる作家たちが存在したが，廉想渉もその一人であった。彼は文壇と距離を保ちながら，しかし自身の目指す文学について「文学は広く自由な世界をもって，自主的に育成，発展されなければならない」[38]と明確に述べている。すなわち，廉想渉が理想とする「民族文学」とは，一切の

社会，時代的制約も受けない自由な文学であるといえる。だからこそ朝鮮戦争の勃発によって，自らの文学を戦争という状況下に従属させることを拒否したのである。

結局，廉想渉にはいわゆる「戦争文学」を創作する意思はもちろん，自身の作品において戦争を奨励することも，逆に戦争の惨劇を告発することも，ましてや戦争の意味を問いただす必要性などは感じてはいなかったと考えられる。廉想渉が目指す「民族文学」は，むしろ文学的素材としての戦争を無視するところから始まるといっても過言ではないようである。

しかし一方で，作家である以前の一人の人間，個人としての廉想渉にとって戦争は生死に関わる事件として，やはり無視することはできないものであった。だからこそ彼の戦争期作品には戦争の惨劇の描写や反共意識の高揚，そして戦争の意味を問う姿勢は見られないながらも，そうした状況の中で，生きることに執着し奔走する人々の姿が執拗に描かれるのである。すなわち，個人廉想渉にとって戦争は〈人間の生存本能をかりたてるもの〉であったといえる。ここにも戦争を冷静に捉えようとする廉想渉の視線が感じられるものである。

朝鮮戦争期における女性従軍作家やその他の女性作家らの戦争認識が〈女性をより苦しめるもの〉というように，どこまでも受動的で被害者意識が強く反映されたものであった[39]のに対して，この廉想渉の戦争認識は，文学でもって戦争を乗り越えようという能動的な試み，あるいは文学を戦争より上位に位置付けようという意思が感じられるものである。それを支えているのは何よりも廉想渉の統一文学，民族文学達成への固い決意と熱望であったといえる。しかしながら，この熱意とは裏腹に，廉想渉の戦争期における文学理念は当時の文壇において正統性を持ちえることはできず，その後の作品の評価においてもほとんどその異質性，異端性のみが問題視されたのである。

3．廉想渉の女性観と女性描写

先にも少しふれたように，廉想渉の戦争期短篇小説では戦争の苛酷な時代，社会状況のなかで変貌してしまった女性たちの姿が，否定的な視線から描かれているという特徴があることがわかる。「泡」では就職口を紹介してもらおうという目的で，英文学界の権威である主人公イ・ジョングを訪ねてきたスギョンとヘランを通して，自ら夫に妾を紹介したり，離婚を繰り返す，というように破天荒な生き方をする女性像が描かれていることが注目される。彼女たちは戦争下で生き抜くために「男」を利用しようとするだけでなく，女性同士でも自分の利益のためにお互いを牽制し合うなど，利己的な面もさらけ出す人物として描かれる。

昔，ジョングと同じ学校の英語教師であった友人ヘランについては，特に外見的な

変貌の様相について以下のように強調されている。

両頬がぼこんとくぼみ，下あごがげっそりやつれて，上まぶたがぼこんとへこんだのを見ては，力なく垂れ下がった上まぶたの中で精彩をなくした瞳が不意の興奮にやたらとちらちらしている様が，とてもヒステリーがあるようである。いつごろの外套なのか，ぐったりして汚くてのりが落ちた灰色の外套だけが，若かった時を思い起させるように，顔とは似つかわしくなく見えた[40]。

一方ジョングはこのような描写と対比させるように，黄色のチョゴリに桃色のチマを身にまとった，若く美しかった頃のヘランの様子と，その頃の幸福な時間を思い起し感傷的な気持ちに浸りもするのである。さらに彼は，スギョンとヘランの5年，10年後の姿を想像し気の毒に思うなど，女性の老いに対して過敏な反応を見せる。その反面，彼女らと同じように時を過ごしてきたはずのジョングは，「まだ若くてスマート」[41]で女性を惹きつける魅力の持ち主として描かれる。このような，女を哀れむ男，男をうらやむ女という対比的描写は必然的に，女性の優位に立つ男性という構図を生み出す効果を発揮する。

避難途中で行方の分からなくなっている妻と娘の安否を心配し，不安と孤独を抱えたジョングであるにも関わらず，後日一人でジョングを訪ねてきたスギョンに対し，「今ごろやって来て，藁をもつかもうと飛びつくようなやり口」[42]が不快だと感じ，タバコ代でも与えて縁を切ろうとする態度には，妻や娘を含め，女性らの苦しい状況に同情や理解を示す思いやりなどは微塵も感じられない。ただ，男である自分を都合よく利用し生き抜いていこうとする女性への軽蔑や拒否感が露骨に表れているのみである。

同様に「欲」という作品においても，男性に頼って生きる姉を朝鮮戦争という時代の中では仕方のないことだとしながらも，離れに住む金先生の部屋に上がりこみ，笑い声を立てる姉の声に淫蕩なものを感じるチョルの視線には，彼女に対する軽蔑心が強く感じられる。加えてこの作品では，余裕など全くない避難生活にも関わらず父の祭祀にこだわり，子供のようにわがままを言い，挙句の果てにはお供え物のボラを独り占めしようとする年老いた母の姿や，チョルには理解できない考え方をする妻など，姉以外の女性も決して肯定的には描かれていないことがわかる。

一方でやはり，前夫と死別してから3年もせず再婚したものの，その後も他の男との噂の絶えない姉に対するチョルの視線にはとりわけ厳しいものがある。「6・25が姉さんには2度目の解放だったというわけだ」[43]と姉の変わり様を皮肉るチョルの言葉

には，「女」を売りにし「男」に媚びることで生き抜いていこうとする女性に対する非難も強く表れている。

このように，戦争によって変貌や転落を余儀なくされたり，「女」であることを活かして戦時下を生き抜いていこうとする女性の姿は，女性従軍作家やその他の女性作家の戦争期作品においても当然描かれている素材ではある[44]。しかしながら，彼女らの女性を描く視線には廉想渉のように否定的なものは感じられない。女性作家らにあっては創作上の重要な問題と関心事が戦争とその勝利にあるのではなく，戦争によって次第に極限状況に追い込まれていく女性たちの姿を描くところにあったためである。このように女性としての自らの危機感を背景にした不遇な女性の描写には，否定的な視線など入る余地もないのである。

さらに，女性作家らの作品に描かれる女性の変貌と転落の直接的，あるいは間接的原因となるのは男性であるという共通した特徴がある。これには，女性作家らにあって男性は女性を不幸にする存在であるということが強く認識されていることが背景になっているといえる[45]。これに対して廉想渉が描く女性の変貌と転落の原因は，あくまで女性自身にあるように描写されるのである。

以上のように，戦争期における女性の変貌と転落という同じテーマを扱っていながらも，女性作家らは女性が変貌し転落するに至る原因やその過程を重視しているのに対し，廉想渉は女性の変貌様相や，転落後の過程を重視しているという対照的な様相が明白に表れている。

廉想渉のこのような女性描写の特質については，「廉想渉は最初から大部分の女性登場人物を否定的に設定した」[46]として，初期短篇では新女性の虚偽意識を攻撃し，後期短篇では中年女性たちの愛欲と貪欲さを赤裸々に描いていると指摘したものがあり，他にもこのような問題の指摘をいくつか発見できる[47]。このことから，廉想渉の否定的な女性描写という特徴は，朝鮮戦争期に発表された作品だけに限られるものではないと見ることもできる。では，このように廉想渉が描く否定的な女性像と，そのもととなる女性観形成の背景にあるものは何であろうか。そこには，「年長の男性による女性及び若年，子供の支配と権力の独占」[48]と定義される，いわゆる「家父長制」的社会の影響があるのではないかと推測される。

父親たちの支配である家父長制というのは，男性主導，男性支配，男性権力の制度であり，女性を統御する制度でもある。女性には家庭と家族という私的領域が与えられ，その枠から出ることは許されない[49]。すなわち女性は，貞淑な妻であり母であることが何よりも求められるのである。そのため，財産や家族の保持，あるいは父権の確保のために「女性の性は，逸脱しないように特別に統御される必要があった」[50]のであ

る。家父長制社会にとって最も嫌悪すべき女性というのは，家族の基盤を揺るがす性的に自由な女ということになる[51]。

廉想渉の保守性と伝統への復帰性[52]は当然，このような家父長制的社会が求める女性像，すなわち貞淑で従順であり，家庭と家族を守る女性を容認し，それとは反対に淫蕩で反抗的であり，生存，性的本能に忠実な女性は否定的に描く結果を生むのである。廉想渉の作品において，女性解放運動の流れとともに登場した新女性が否定的に描かれる背景として「キリスト教に対する不信」[53]を指摘する見方もあるが，やはりこれも上にみたような，廉想渉の家父長制的な女性観の影響が反映しているのではないだろうか。女性の自由と解放を訴え，家庭や家族の私的領域から公的社会に出て行こうとする新女性は，廉想渉の価値観においては到底容認できるものではないからである。

以上のように，廉想渉の女性観の背景にあるものが廉想渉の生きてきた家父長制的社会の価値観であったことを考察してきたが，むろん，家父長制というものは社会及び国家の基盤であり，またそれらを維持するシステムであるからには，彼一個人の問題としてのみ把握し糾弾する性格のものではないといえる。つまり，家父長制的社会のもつ伝統的な女性観の問題として，より広い視野から捉えるべきであろう。

こうした問題も踏まえて，廉想渉の作品における女性像の問題の延長線上に，彼の家族観をかいま見ることが可能である。廉想渉が家族を重視していたという事実は，戦争期の6作品だけをとってみても，その人物設定が家族を中心としたものであることから，十分に計り知れる[54]。そして当然のことながら，廉想渉の家族観も彼の女性観同様，家父長制的社会の価値観を背景にしたものである。つまり，父親が絶対的存在として君臨し，それに従属する貞淑で道徳的な妻や娘によって形成される家族の形である。このことがよく反映されているのが，廉想渉の家族をモデルに，その避難行程が描かれた自伝的作品の「山トッケビ」である。

作品内容のところでも触れたが，ヨンイ一家のなかでは家族の誰かが父の夢をみるといいことがあるというのが信条になっており，ソウルへの山中を歩き始めたその日はまさにそのような日であった。父と共に歩いているような心強さで進む彼女らは，間一髪で爆撃を逃れたことを父の夢のおかげと父に感謝し，その後，人民軍兵士からも奇跡的に逃げ延びることができるのである。この勇気ある家族の姿を描く目的については，前述したように「38度線を越えた実力を積んだ家族だという自負心のため」であるという指摘がある。ただそこにはやはり，勇敢な家族の精神的支柱であり絶対的な存在である父「廉想渉」の，一家の長としての自負心の方がより強く反映されているのではないかと考えられるのである。「彼の小説は結局，貞淑性と家族の価値を擁

護するためのメロドラマの性格を帯びている」[55]とする見解があるように，この作品でも「山トッケビ」の仮面を被った空想上の生物のような人民軍兵士の登場と，見えないながらも家族を擁護する絶大な父の力によって，家族皆が彼らからの奇跡的脱出を成し遂げるという話の展開には，通俗的なものを感じざるを得ない。

以上で検討してきたように，廉想渉の女性観や家族観は家父長制的社会の価値観をその土台にしたものであるということが明らかとなった。それゆえ，貞淑性に欠け，媚びを売るなど，家父長制的価値観ではマイナス・イメージとなる女性たちは，当然の結果として否定的に描かれるという特徴がある。

戦争期における女性従軍作家やその他の女性作家の作品において描かれる男性は，〈女性を不幸にする存在〉であるという強すぎる認識のために，ステレオタイプな男性ばかりが登場するという結果となり，男性の描写が一面的なものとなってしまっているという問題を生じさせているが，これとは逆に廉想渉の女性観が家父長制的社会の価値観の域から出ないものである限り，彼が描く女性像も一面的，あるいは偏向的なものにならざるを得なかったという限界を指摘することができるのである。

Ⅳ．小結

本稿は，朝鮮戦争期に海軍に入隊して現役将校として活動しながら創作活動を行った，廉想渉の短篇小説6篇を対象として，その特徴や問題点について考察してきた。そのなかでまず，廉想渉の海軍入隊の動機が作家，記者的活動欲求によるもので，戦争への積極的な参与の意図などは介在していないという事実が確認された。このような動機は，海軍生活における廉想渉の存在自体の違和感を突出させるだけでなく，この時期に書かれた彼の短編6作品に，その海軍体験の痕跡や成果を少しも残さないという結果をもたらしている。

しかしながらこのことによって，廉想渉が戦争に対して無関心であったということはできない。廉想渉の作品において，当代社会を背景にするという特徴は戦争期にも引き継がれ，6作品全てが朝鮮戦争期を舞台にしたものとなっており，戦争は作家としての，あるいは個人としての目を通して作品に描き込まれているからである。

まず，個人としての廉想渉にとって戦争は戦闘のみならず，食糧問題や思想問題などによっても，死と直結する大事件であるからこそ，〈人間の生存本能をかりたてるもの〉と認識されるため，作中人物は皆，他人を犠牲にしても自らの生命を保守しようとするなど，生きることへの執着をあらわにする人物として描かれる。そのような人物像のなかで特に「女」であることを売りにし，生きることに執着する女性の姿は否定的な視線で描かれるという，もう一つの特質が明らかとなる。これは家父長制的社

会の価値観の域内でのみ，女性や家族を捉えようとする廉想渉の限界であるといえるが，この問題はやはり廉想渉個人だけの問題ではなく，家父長制的社会のもつ女性嫌悪の傾向という特質をも含めて，より大きな視点で捉えるべき問題であるといえる。

以上のような一個人としての廉想渉の戦争認識には，ある程度の一般性があるのに対して，作家としての廉想渉の戦争認識は特異性を見せている。「解放」以後，朝鮮民族による独自の民族文学，統一文学の擁立を渇望し模索していた廉想渉にとって，戦争は「一時の紛擾」とされ，別段問題視されないのである。それゆえ「戦争文学」を創作することによって，戦争そのものについて肯定的であれ否定的であれ，論ずることの無意味さを認めるとともに，文学の多大な力を信じていた廉想渉は，戦争よりも高い次元に文学を位置付けることで戦争を克服し，理想の文学を目指そうとしたのではないだろうか。「文学が民族の消長と国家の興亡に及ぼすところ至大な影響をもつ」[56]と主張し，文学への強い期待と信頼を見せる廉想渉であるが，その意識の強さゆえ，「民族の消長と国家の興亡」をまさに大きく左右する戦争を「一時の紛擾」と見なしてしまう落差の大きさを見せている。

廉想渉の戦争期小説がその異質性において注目され，評価される結果を生み出している背景には，以上のような彼の個人，そして作家としての戦争認識の温度差によるところが大きいと考えられる。すなわち，作家レベルでは戦争を重視しない姿勢を見せる廉想渉であったが，当然，個人レベルでは戦争による影響を無視できない状況に置かれたなかでの作品創作は，作品の舞台を戦争期に設定しながらも，戦闘状況や惨劇を暴露したり，戦争そのものの意味を問うことを拒否し，ただ「生存本能」に忠実な人々の世態を描くことで，そのバランスを保っているように見える。

「文学を天職と感じ，ほとんど殉教者的意気と清く高らかな気概で一生を捧げた」[57]というように，廉想渉の作家としての意識の強さや熱意は評価できるものであるが，その意識の強さゆえに，海軍での彼の存在が異質であったように，戦争期の彼の作品はその異質性において評価され，それゆえにまた彼の戦争期の文学理念が大多数の支持を獲得しにくいという結果をもたらしているといえよう。

今後の課題としては廉想渉と同様に，朝鮮戦争期に従軍作家として創作活動を行った他の男性作家の戦争認識と，実際の作品のもつ特徴についても考察していきたい。

註

1）金末峰（1901～1961），康信哉（1924～），韓戊淑（1931～）

2）孫素熙（1917～1987），尹金淑（1918～），張徳祚（1915～），田淑禧（1919～），崔貞熙（1906～1990）

3）廉想渉の処女作品である「標本室の青ガエル」（『開闢』8～10号，1921，5）は朝鮮最初の自然主義作品と評価されている。（『韓国文芸事典（増補版）』，語文閣，1991，p.385「廉想渉」の項）

4）同上，p.385

5）このことからイ・ナムホは，廉想渉短篇の本当の姿は解放以後の後期作品の中から探さなくてはならないと指摘している。（イ・ナムホ「廉想渉短篇小説の特徴」，権寧珉編『廉想渉文学研究』，民音社，1987，p.230）以下，本稿では便宜上人名，題名等を含む朝鮮語文はすべて筆者試訳によって示す。

6）朝鮮日報（1952．7．18～1953．2．20）連載。この他にも廉想渉は戦争期に「紅焰」（『自由世界』，1952．1～1953．2）という長篇を書いている。

7）現在把握できている範囲では，戦争期に14篇の短編小説を発表している。（前掲『廉想渉文学研究』，「II 作品目録」，pp.477～478，申永徳『韓国戦争期従軍作家研究』，国学資料院，1998，pp.290～291，金允植編『韓国現代文学年表』，文学思想社，1988，pp.52～55等を参照。）

8）この時期の雑誌，新聞等には現物を確認できないものが多い。初出の確認出来なかったものに関しては，作品集『まだらの時代風景』（正音社，1973）に収録されたものを参考にした。また，発表誌(紙）の不明等によって今回確認できなかった作品は以下の通りである。

「**잭나이프**」（ジャックナイフ），1951．9．18

「純情」，『希望』，1951.12～1952．1

「自転車」，1952．6（「生地獄」と改題）

「少年水平」，『軍港』創刊号～2号，1952．9～11（「恋しい人の情」に改題）

「血闘」，1953．3

「家宅捜索」，『大韓新聞』，1953．7

「**해 지는 보금자리** 風景」（日が沈むねぐらの風景），『文化世界』，1953．7

9）廉想渉「つまらない回想」，『芸術月報』，第5号，1960.12，p.147（金允植『廉想渉文学研究』，ソウル大学校出版部，1987，p.847より再引用）

10）全軍将兵の思想先導を担当する一方，国内外情勢の認識を新しくし，軍民融和を企図するために発足した。

11）以上，廉想渉の海軍入隊を前後する時期の背景と入隊経緯については申永徳，前掲書『韓国戦争期従軍作家研究』，p.193。また金允植，同上『廉想渉文学研究』，pp.844～859にも廉想渉の海軍生活も含めた詳しい記述がある。

12）尹一柱「海軍生活で」，『現代文学』9巻5号，1963.5，pp.63～64

13）廉想渉「私の軍人生活」，『新天地』7巻1号，1951.12，p.101

14）廉想渉，同上，p.102

15）尹一柱，前掲「海軍生活で」，p.65

16）廉想渉によって書かれたその時の記録である『六二艦作戦従軍記』（未公表である）は，遺族によって保管されているという。いつ執筆されたものであるかは不明だが，表紙には「掲載時には筆者に連絡してください」と付記されているという。（申永徳，前掲書『韓国戦争期従軍作家研究』，p.195）

17）この時には，文壇の先輩である廉想渉よりも李無影の方が立場が上になってしまい，お互いに気まずい思いをしたようである。（尹一柱，前掲「海軍生活で」，p.65）

18）申永徳，前掲『韓国戦争期従軍作家研究』，pp.193～197

19）尹一柱，前掲「海軍生活で」，p.65

20）金允植，前掲『廉想渉文学研究』，p.854

21）申永徳，前掲『韓国戦争期従軍作家研究』，p.199

22) 廉想渉「解放の朝」，p.107
23) トッケビとは鬼神の一種で，人の姿をして異常な力と才能でもって人をたぶらかし，意地悪ないたずらを多くするといわれる。(『東亜新国語辞典』，斗山東亜，1989，p.530，「トッケビ」の項)
24) 金鍾均「廉想渉とその小説の特徴—弁証法的生の現場」，前掲，権寧珉編『廉想渉文学研究』，p.65
25) パク・ヒョンス「戦争の客観化とその意味」，チョ・ゴンサン編，『1950年代文学の理解』，成均館大学出版部，1996，p.155　この他にも「死を担保にするイデオロギー的現実の全景化のなかで物質的所有欲の人間的本質を見せてくれる。」(イ・ボンイル『1950年代分断小説研究』，月印，2001，p.61) という見解などがある。
26) 申永徳は「金を取り巻く人間たちの葛藤を扱うのは廉想渉小説の共通的現象だが，解放以後の作品により顕著にあらわれる。」(申永徳，前掲『韓国戦争期従軍作家研究』，p.174) とし，その背景として「現実矛盾との対決を放棄した作家意識の反映」(p.177) があると指摘する。
27) 金鍾均，前掲「廉想渉とその小説の特徴—弁証法的生の現場」，p.73
28) ソウルが奪還された同年10月27日に政府がソウルに還都したあと，同年11月11日「反逆者処罰特別措置令」が公布された。(申永徳，前掲『韓国戦争期従軍作家研究』，p.200) また，この時期にソウルから逃げ出せなかった少なくない残留文人たちが，左翼系の文化団体である〈朝鮮文学家同盟〉に加入して活動した前歴が問題視され，彼らに対する司法処理問題も論議されていた。
29) 廉想渉「解放の朝」，p.100
30) 前掲，金允植『廉想渉文学研究』，p.863
31) 同上，pp.860～861
32) 李銀子『1950年代韓国知識人小説研究』，太学社，1995，p.129
33) 廉想渉「山トッケビ」，(『まだらの時代風景』，p.251)
34) 金允植，前掲『廉想渉文学研究』，p.864
35) 廉想渉「新しい設計」，『農民小説集』，大韓金融組合連合会，1952，p.78
36) 廉想渉「韓国の現代文学」，『文芸』14，3巻2号，1952．5，p.12
37) 廉想渉が23歳であった1919年3月1日に朝鮮で3・1独立運動が起こると，彼はこれに呼応して在大阪韓国人を糾合し，独立万歳運動を主導しようとした嫌疑で検挙され投獄された。その後，無罪判決によって同年6月10日には釈放された。
38) 廉想渉「民族文学という用語について」，『湖南文化』創刊号，1948．5，p.13
(ジョン・フンナム『解放期小説の時代精神』，国学資料院，1999，p.432より再引用。)
39) 女性従軍作家たちが戦争期に発表した長，短篇全27作品中，半数以上が女性の苦悩や悲哀を中心に描いている。同様に，その他の女性作家の戦争期作品11篇においても女性の抱える問題や悲哀が中心に描かれていることが分かる。(戦争期の女性従軍作家とその作品については，拙稿「朝鮮戦争期の韓国女性従軍作家とその作品について」(『朝鮮学報』第百九十一輯，平成16年4月，pp.107～149) において考察した。
40) 廉想渉「泡」，p.142
41) 廉想渉，同上，p.145
42) 廉想渉，同上，p.151
43) 廉想渉，「欲」(『まだらの時代風景』，p.278)
44) 女性作家の作品中，康信哉の「その母女」(『文芸』15号，1953．2) では，女であることを利用して，時に男性に媚びながら逆境を乗り越えようと企む母と娘の姿が描かれている。他に，金末峰の「転落の記録」(『新天地』54号，1953．7) や，女性従軍作家の作品では，孫素熙の「距離」(『戦線文学』5号，1953．5) などがある。

45) 女性たちにあって「男性の不在」は戦争期における重大な問題であり，これをテーマとして書かれた作品も多くみられるが，それと同様に，男性の存在によって不幸になっていく女性の姿を描いた作品も少なくない。

46) イ・ナムホ「廉想渉短篇小説の特徴」，前掲，権寧珉編『廉想渉文学研究』，p.236

47) 李銀子は「50年代小説全体において女性の転落や洋妾（西洋人相手の娼婦）の話題は最もよく描かれた素材の一つ」（p.133）として，特に「末期になると不倫女性の女人像を多く」（p.120）扱っていると指摘する。（李銀子，前掲，『1950年代韓国知識人小説研究』）

48) 若桑みどり『戦争とジェンダー――戦争を起こす男性同盟と平和を創るジェンダー理論―』，大月書店，2005，p.10

49) 若桑みどり『戦争がつくる女性像』，筑摩書房，2000，p.22　また，若桑は「家父長制はあらゆる戦争と抑圧の根本原因」と主張する。（p.25）

50) 若桑みどり，同上，p.59

51) さらに若桑みどりは，家父長制的社会，または全体主義国家にとって最も始末の悪い存在としての女のマイナス・イメージの具体例として「子供を産まない女・男性的な女・結婚しない女・娼婦・性的な女（誘惑する女）」を挙げている。（若桑みどり，同上，pp.52～53）

52) 金鍾均「廉想渉の短篇小説―特に同体異名の問題作を中心に」，『詩文学』84号，1978，7，p.113

53) 柳楊善「近代指向性の問題と現実裏返しの手法」，前掲，権寧珉編『廉想渉文学研究』，p.138

54) イ・ナムホは，廉想渉小説の現実は家族の枠から抜け出せないと指摘している。（イ・ナムホ，前掲，「廉想渉短篇小説の特徴」，p.239）

55) 鄭明煥「廉想渉とゾラ―性に対する見解を中心に―」，前掲，権寧珉編『廉想渉文学研究』，p.329

56) 廉想渉，前掲「韓国の現代文学」，p.12

57) 廉想渉，同上，p.12

おわりに

本稿での分析を通じて1948～53年の間に廉想渉の時局に対する姿勢が，朝鮮戦争前と開戦後とではやや異なっていることが明らかになった。廉は1948年に発表した「暁風」では，南北統一という切なる願望を作品に託して語っていたが，戦争が始まると逆に政治的なものから超脱しようとした様子もうかがわれる。さらに言うならば，民族意識は堅持しつつも，直接的な政治的な言動ではなく，文学本来の力でもって戦争という極限状況を乗り越えようとしたのではないかとさえ思われるのである。

一方，廉想渉の女性観や家族観には相当，保守的なところがあり，それが特に朝鮮戦争期の作品に色濃く反映されていることが明らかになった。そこには民族相殺であるとともに，米ソを中心とする国際戦争の様相を呈していた朝鮮戦争という特殊な時代，社会状況のなかで，廉想渉が純粋に民族的なもの，伝統的なものを希求していた，その強い意識が表れていると考えられる。このことは別途さらに論じられるべきであろうが，以上のことを留保すれば，朝鮮戦争を挟んだ激動の時期に，彼が創作活動を通して庶民の生活レベルでの視線からこの時代に真摯に向き合った様子は，本稿を通してもある程度うかがい知ることができたのではないかと考える。

今後，朝鮮戦争期の代表作「驟雨」を含めての総合的な考察を課題としたい。